

藤井懶齋年譜稿（四）

—元禄元年から元禄十年まで—

勝又基*

元禄元年（一六八八）戊辰 七十二歳

○二月、懶齋著『徒然草摘議』刊。

【徒然草摘議】

大本三卷三冊。漢字平仮名交じり文。刊記「貞享五戊辰曆／二月吉旦／堀川通六角下ル西坪町／栗山伊右衛門板行」。序①：藤井理定漢文序「徒然草摘議序」。序記「歳在強圉単閼。坤月之望藤井理定叔觀滌^ツ筆^ツ菊潭^ツ」。序②：内題のあとに無署名序あり。漢字平仮名交じり文。序題・序記ないが自序と思われる。

作者について、藤井理定（象水）序には「未だ何人の手に出ることを知らず」と不明のように書く。しかし写本随筆『睡余録』では自著として挙げ、また生前から『元禄五年刊書籍目録』にはすでに「三 同摘疑

藤井蘭齋作」とある。作者は懶齋で間違いない。この事は拙稿『仮名本朝孝子伝』の一側面（「雅俗」第八号〈平成十三年一月 雅俗の会〉でも述べた。

さて該書は、『徒然草』の章段に対し、道義的な面から批判を加えたものである。自序によれば、長男が病を得て、経業にたゆんで『徒然草』を枕元で読んでいた。世にもてはやされるのも理解できるが、中には読まないで欲しいと思う箇所も多い。そこでそうした章段二十七を採り上げて、自分の意見を論じたものであるという。該書の思想面については川平敏文「徒然草をめぐる儒仏論争——江戸前期文芸思潮一斑」（『雅俗』第八号〈平成十三年一月 雅俗の会〉）が、『野槌』以来の徒然草注釈書の展開の中で位置づけを行っている。川平によれば、これまでの徒然草注釈書の三教一致思想的な傾向や文芸的解釈に対し、再び思想・道徳的な見地から反論を加えたものであるという。そして羅山『野槌』に比べるとより「好色」「垣間見」など、日常道徳的な問題に多くの言を費やしているとしている。同『徒然草大全』の到達点（「雅俗」第五号〈平成十年一月 雅俗の会〉）にも、好色を戒めるという意識における他注釈書とのせめぎあいを指摘している。

○五月、懶齋著『国朝諫諍録』刊。

【国朝諫諍録】

大本二卷二冊。漢文。自序「国朝諫諍録序」として「貞享丁卯中秋穀旦／伊蒿子膝臧季廉叙」。跋文は題なく「歳次丁卯秋九月日／少男藤井理定謹識」。早印本の刊記「貞享五龍集戊辰仲夏日／武城書林 万屋清兵衛／洛下書林 梅村弥左衛門／同 犬飼猪兵衛／寿梓」。都立中央図

書館加賀文庫本（加賀文庫／11230）では、書肆名のうち犬飼猪兵衛の下に墨印が捺されている。所見本は全て同板だが、下巻十七丁裏一行目頭の文字が「儀」「議」となる異同がある。「儀」とする内閣文庫本（二六七／二五）などが早印本である。求板本に、梅村弥左衛門単肆本（刊記「貞享五龍集戊辰仲夏日／洛下書林 梅村弥左衛門／寿梓」。八戸市立図書館蔵本〈図三／八七〉）などがある。

該書は日本の歴史から諫諍者、すなわち主君を諫めた人物を集めたものである。野見宿禰、老伎直真根子といった『日本書紀』の登場人物から黒田如水、六角義郷といった戦国時代の人物まで、計三十七章から成る。執筆にあたっては、次男の理定（象水）が校閲に当たったという（跋文）。

序文によれば、中国に多い諫輔（諫め補佐する人）は日本においても少なくない筈で、それを集めて欲しいという客の望みに応じたのであるという。しかし、後に【鳩巢・木齋往復書簡】で見える限りでは、懶齋自身にも幕府へ進言したいという強い意欲があったらしい。これを考慮すると、『国朝諫諍録』が単に客の求めに応じて成ったものと片付けてしまふ訳にもいかない。

懶齋著書で刊行されたものの内、漢文で書かれたものは先の『本朝孝子伝』と該書のみである。ただし該書には挿絵がない。また巻上の二「大伴建日臣」には「臧末だ熱田本紀を聞せず。此の事、之を西峯松下氏に得たり」（原漢文）と、松下見林の名が見える。懶齋の京都におけるネットワークが窺える一文である。

【家族〈三〉長男・革軒】

先に懶齋の娘の死について述べたが、懶齋にはほかに二人の息子がいた。

長男は革軒。字子剛、諱敬節。革軒は号。長子であることは『睡余録』に「長子敬曰」とある所より判明する。

懶齋『徒然草摘議』（貞享五年〈一六八八〉刊）自序に「わが太郎なる子、此ごろわづらふ事侍て、しばらく経業にたゆみ、たゞつれづれ草をなむ枕のもとにひらきをけり」とあるのは彼のことであろう。いっぽう元禄八年（一六九五）に懶齋が書いた書簡（『扶桑名賢文集』巻五所載「答長岡恭齋書」）には、「昆（引用者注：兄の意）は武城に在り」（原漢文）とあるので、このころ江戸に住んでいたらしい。

貝原益軒『雜記 陽』（記事年次不明）に「懶齋子藤井敬節／下長者町千本東入北かは」とあるのは彼の居所を記すものであるが、【居所〈三〉千本】に記した通り懶齋と同居していた時期があったらしい。懶齋の鳴滝隠棲後、千本の住居を預かったものか。

職業は医者であったようだ。大江文城『本邦儒学史論攷』（昭和十九年七月 全国書房）第八篇第一章には、「子革軒、字は敬節、真邊氏を冒して医者をやとし」と、父の医業を継いだとしている。また吉田秀文『閑暇漫録』（寛政三年跋、写本。高橋昌彦氏蔵）に掲載される伊蒿子「与二子 四十四韻」という漢詩も参考になる。この詩は医者が患者を全て助けられる訳ではないと述べたあと、次のように言う（原漢文）。

我一たび茲を思ふてより 日に針氈に座するがごとし
遂に乃ち寸匕を投じ 侯門臂を擅にして還る

如今窮巷を踰む 釜甑動もすれば烟を絶つ

身を奉ることは是のごとしと雖へども 心に在ては則ち晏然

爾等旧業に復へる 我豈に悵々たらざらんや

「臂を擅にして」は医者を辞めることか。この連は懶齋が久留米藩医を辞したことを指すものと思われる。「晏然」はやすらかなさま。「悵々」

はうれえ悲しむさま。つまり久留米藩医を辞して京都に戻ってからは、貧しいながらも心は安らかであった。しかし二人の子が自分の旧業すなわち医業に就いてしまい憂えている、と言っているのである。どうやら兄弟はともに医者であつたらしい。

墓は藤井懶齋と同じ鳴瀧の西寿寺に存する。墓碑に「(表) 革軒真子剛之墓」「(裏) 姓真邊氏諱敬節ノ字子剛号革軒ノ宝永六年(引用者注：一七〇九)五月十七日没」とあり没年が判明する。懶齋の没後、さほど経たずに没した計算になる。

【家族(四) 次男・象水】

次男は藤井象水。通称団平、名理定、字叔観。象水は号。『先哲叢談』が「象水は懶齋の長子なり」(原漢文)とするのは誤り。あとで見る『前編鳩巢先生文集』に「象水は伊蒿先生の長子」(原漢文)とあるのを襲ったのであろう。

先に兄弟がともに医者であつたと記したが、象水に関する資料を探すと、医者よりも儒者・軍学者として認識されている事が多い。『長沼家学伝系』(国会図書館蔵写本)に「藤井団平 京都ノ儒者ナリ。初澹齋ニ親炙ス。後土岐ニ從テ学ヒ許可ニ至ル。先師ヲ葬祭スル時、礼儀ヲ司ルコトヲ任スト云々」とある。長沼澹齋に兵学を学び、澹齋の死後は土岐光春の門弟となり、彼から長沼流兵学の免許を受けたらしい。澹齋の葬祭を取り仕切つたというのは、儒式の葬祭二礼の有職をわかりやすく記した『二礼童覧』の著者である藤井懶齋の次男として興味深い所である。

また、懶齋の父の著作によく名前が見えるのも特長である。『徒然草摘議』(貞享五(一六八八)年二月)には序を寄せており、『国朝諫諍録』(元禄元(一六八八)年五月刊)では跋を寄せるほか、校訂にも携

わつたと言う。父の命により、白田畏齋の行状も記したという(元禄三年(一六九〇)の条参照)。

元禄八年に懶齋が書いた書簡(『扶桑名賢文集』巻五所載「答長岡恭齋書」)には、「季は定れる居無し」(原漢文)とある。『本邦儒学史論攷』は、「別に漂泊子の号があり、詩文に長じていた」とするのを併せて考えると、漂泊の癖があつたものか。宮川忍齋『槎行記』(写本)によれば、元禄十五年(一七〇二)十月、忍齋が藩主に従つて京都に立ち寄つた際、千本の懶齋邸を訪れてしばし座を囲んだ。その時の記事に「……と其子の象水もともにいひあへり」とある。この時は同席していたらしい。

象水の性質については、元禄十年【鳩巢・木斎往復書簡】の項に掲載した書簡②で評されていた。それによれば、兵学や天下国家を論じることが好きであり、父の友人に嫌われていたが、気に掛けない、という人物であつたらしい。同じく性質に関する記事が龍野藩儒・股野玉川の隨筆『幽蘭堂隨筆』(たつの歴史文化資料館蔵。請求記号：文学六)に見える。これは「高山伸繩(彦九郎)話」として書き留められた二条のうちの一つである。

○藤井蘭齋が子団平と曰しは、正敷平將門風の男ニ而、党類も余程有之。箱根を三度通行、其時の詩に、「王者三たび過レドモ皆不知」トいふ句アリと云々。後熱病ニテ相果候由。

示す方向は室鳩巢の評するところと同じ、と考えて良いだろう。墓石は父と同じく西寿寺にあり、表面に「象水子膝翁觀之墓」刻されている。没年は未詳だが、延宝八年(一六八〇)【常磐木】の項に記したとおり、遅くとも享保六年(一七二一)には没していたらしい。

〇十一月、懶齋著『二礼童覽』刊。

【二礼童覽】

半紙本二卷二冊。漢字平仮名混じり文。早印本の刊記「元禄元戊辰歲十一月吉祥日／西村孫右衛門開板」（岡山県立博物館閑谷学校旧蔵書、国会図書館本〈一三九／二〉他）。序題なく序記「万治三年七月日」。所見本は全て同板。後印本に、森田長左衛門求板本（岩瀬文庫本ほか）、中川茂兵衛求板本（国会図書館本〈一二七／一〉、無窮会織田文庫本ほか）、須原屋茂兵衛求板本（東京大学附属図書館本〈G二六／四五八〉）等がある。

該書の内容は序文に明記されている。

葬祭の二礼、世のならはしのまゝなるは、あまりにこゝろよからず覚え待れば、朱文公の『家礼』のおもかげ、いさゝか家にあらまほしくて、ひそかにみづから、かの書を抄略し、俗語にかへ、俗礼をまじへ、婦女兒童のともがらまで、是をよみ見て、「かばかりの事はよくなしてん」とおもへらむやうにと書つく。終に此ふた巻となりぬ。よりて名づけて『二礼童覽』となんいふ。

要するに、世の中の葬祭に儒式の要素を加えたいと考えて『家礼』の要点を分かりやすく記した書物だ、ということである。

他の多くの懶齋著作名書き刊本と同様に、これも書物自身には藤井懶齋の署名は見えない。しかし【近世の藤井懶齋伝】に引用した『月下記』④に懶齋の著書として記されており、早くから懶齋作と認識されていたらしい。【懶齋著作と署名】の項で記した通り、後に挙げる享保六年の藤井懶齋著述目録、『元禄五年刊書籍目録』にも懶齋著作とされている。西村孫右衛門から刊行されていることから、彼の著作だと考え

て間違いないであろう。

万治三年（一六六〇）七月の項には、該書の写本の存在と署名について記しておいた。該書も『藏笥百首』と同様、久留米藩医時代に著した写本が刊本化された著作群の一つである。

元禄二年（一六八九）己巳 七十三歳

□正月、梅塙散人著『婦人養草』刊。該書の後印本はのちに懶齋作と仮託される。

梅塙散人著『婦人養草』は大本五卷十冊。刊記「元禄二己巳歲五月上澣日／書林／洛陽 梅村弥右衛門／賀陽 塚本治兵衛／同 半兵衛」。自序末には「貞享第三の冬、我すむ国の白根の雪に、漱金沢の水に盥見る石を鳴し鹿の毛を松の烟にそめてみだりに犀川の菊花水に書ながしつ」とある。漢字平仮名交じり文で、雑纂的に全百七十話を集めた女性教訓書である。和漢の故事・説話を多く用い、挿絵も付す。該書の翻刻・解題は吉本直嗣編『やしなひ草』（平成十年十二月 私家版）が備わる。著者・梅塙散人は加賀で三百石を受けた藩士・村上武右衛門。元禄四年（一六九二）に没している（『加能郷土辞彙』ほか）。

しかし該書が寛政十三年（一八〇一）正月、大坂海部屋勘兵衛から求版修訂本として刊行された際、藤井懶齋の作と仮託された。所見の東京国立博物館本（大本一冊。と七六〇〇）は見返しに「藤井懶齋先生著／婦人養草 全／法橋玉山画」とする。また裏見返しに貼られた無署名跋には、

此やしなひ草は中頃の大儒藤井懶齋先生みづからの息女に示されし

教訓なり。其ことはやはらかにしてかたよらず、しかもあやまりを誠むる事をごそかなり。実に婦女子の手ならずして、曇りなき宝の鑑に准らふべきふみなるべし。

と、懶齋の執筆意図までもが、まことしやかに記されている。寛政期の懶齋が、教訓本の世界では仮託するに足るような存在であったことを示す事例である。

この寛政十三年修訂本は、懶齋に仮託しただけでなく、元禄期の教訓本を寛政期らしい体裁にするため、もとの版木にさまざまな手を加えている。目録を挿絵入りのものに差し替え、挿絵を岡田玉山のものに差し替え、章題番号を通し番号にして一冊本らしくし、痛んだ版は彫り直すなど、挙げればきりが無い。この二書を比較すると、古い版木再生の仕組みが大変よく分かって面白い。

○九月、懶齋著『大和為善録』刊。

【大和為善録】

大本三卷三冊。漢字平仮名交じり文。刊記「元禄二〇年九月吉日 西村孫右衛門藏板」（大阪府立中之島図書館本、三庚図書館本、東北大学狩野文庫本など）。自序「つちのえたつの秋の末つかたよもぎが杣人みづから是をいひて此ふみつくるむねをのぶとぞ」。

「よもぎが杣人」という他には見えない署名である。しかし①「よもぎ」が懶齋の号「伊蒿子」の「蒿」を訓読したものだと考えられる。

②懶齋関係以外にはほとんど出版物が無い西村孫右衛門刊である。③『元禄五年刊書籍目録』『仮名和書』の部に「四 大和為善録 藤井蘭齋」とある。④【懶齋の著作目録】の項で見た通り、享保元年刊『蔵笥百

首』所載「藤井懶齋先生作目録」でも懶齋著書に含まれている。などの点より懶齋作と考えて間違いないであろう。

自序には該書の成り立ちについて分かりやすく記されている。

中にも大明永楽のすべらみこと、みづからえらびあつめさせ給ひし、『為善陰隲』ぞ、ことにあはれはふかき。……中略……これによりて、此ふみ世にひろくつたへまほしきを、からの本のまゝにては市町野山のいやしきがよまざらむことをおそれて、此ごろひそかに倭語にうつしかへ、其さまを絵にあらはし、ついでに又類おなじく、ことふみに見えたるをも、これかれくはへまし、末にはこれらの人の中に求めえたるをなん、しるしぬ。人の伝、すべて六十にひとつをかく。又伝のしりへごと、ひそかにをのがこゝろをつけて、評論にかたどる。巻はわかちてみつとなし、名づけて『やまと為善録』といふ。

明・永楽帝編『為善陰隲』十巻の中から世に広めたい章段を、和語に改め、絵を付した。さらに「ことふみ」すなわち他書から同様の人物を加え、末には日本の人物から集めたものを記したという。上巻最終章「張孝基」章題下には「以上為善陰隲の内」とあって、『為善陰隲』から採ったのが上巻の二十八人のみだということが分かる。中巻第一章「王義方」の章題下には「是より下は『太平御覧』『事文類徒』『廻吉録』などいふ書の中よりとりぬ」とあって、これらから採られた十八章が収められている。さらに巻下第一章「淳和皇后」章題下には「是より下は本朝よりとれり」とある。下巻全十三話に掲載された人物の時代はさまざまであるが、十「不破民部」では「植木交庵かたる」、同十一では「橋本松齋」では「中素軒かたる」などと、書物からの情報ではなく聞書も含まれていることが分かる。

さて該書は刷りと改版を重ねたようだ。調査不十分ながらその概要をのべておこう。後印本には正徳三年（一七一三）大坂安井弥兵衛求板本のほか、その書肆名を削って「安永三年甲午正月吉日 大坂 心齋橋塩町 原平兵衛板」の奥付を付したものである（東京大学霞亭文庫本）。

また文政七年（一八二四）二月には「陰隲伝」と改めた改題本が出された（所見本青森県立図書館本。三巻三冊。江戸西村源六他三肆。外題「和漢陰隲伝 画入 上（下）」。この諸本には匡郭がない。また「文政丙戌（文政九年（一八二六））覆板／和漢陰隲伝／江戸本石町十軒店万笈堂英平吉」の見返しを持つ本（八戸市立図書館本）、同じ見返の書肆名が「江戸中橋広小路町 西宮弥兵衛板」となっている本（東京大学中央図書館本）もある。

さらに天保五年（一八三四）には『和漢陰隲伝』の題で改題本が刊行される（半紙本三巻三冊。江戸西宮弥兵衛他五肆）。そのさい安貴多善民の序が加えられ、挿絵が葛飾北斎画に改められる。また明治七年（一八七四）七月には、『和漢陰隲伝』天保十一年改題本の板木を用いて『訓導必修修身伝』と改題される（東京学芸大学望月文庫本）。

このように『和漢為善録』は、明治期に至るまで形を変えて長い期間読まれた。おそらくは懶斎の著書のうちでもっとも広く読まれた書物ではなかっただろうか。

元禄三年（一六九〇）庚午 七十四歳

○春、稻生恒軒『いなご草』に序を寄せる。この頃までに千本へ転居する。

次項参照。

○五月、稻生恒軒著、懶斎序『いなご草』刊。

所見本内閣文庫本は半紙本一巻一冊。もとは二冊本か。漢字平仮名交じり文。刊記「元禄三庚午年五月吉日 西村孫右衛門開板」。序①（自序）：序題「蝨斯艸序」として序記「元禄三年三月十五日若水稲義宣書」。序②（藤井懶斎序）：「蝨草序」として序記「元禄かのえ午の春伊蒿子楚丈筆をにしの京ちもとの桜が陰にそめ侍る」。

該書は出産についての平仮名教訓書である。「一 胎教」「二 保養」「三 臨産」「四 産後」「五 治療」「六 祈禱」「七 通論」の七章からなり、産前産後に気をつけるべき事柄について総合的に分かりやすく記されている。

著者・稻生恒軒は、『古今墨蹟鑑定便覧』（嘉永七年（一八五四）刊）巻下によれば、名正治、字見茂。浪花の人。医術を古林見宜に学んだ後、江戸に出て永井君に仕える。宮津藩への転封にも従い、学舎で吏民を教示した。延宝六年（一六七八）、病により故郷浪花に帰り、同八年（一六八〇）、七十一歳で没したという。

懶斎に序を依頼して来たのはその息・稻生若水。加賀藩に元禄六（一六九三）年から仕え始め、『庶物類纂』の作者として著名である。後年、室鳩巢は若水宛書翰の中で懶斎に言及している（元禄十六年（一七〇三）の項参照）。

成立について、序②には「翁の塚嗣若水子、やつがれと相しれり。来りていはく、『いなご草』もしとる所ありとせば、ねがはくば序つくれ」とあり、懶斎序は若水の申し出によって付された事が分かる。

しかし懶齋は序を寄せただけではなかったようだ。序①では「先生（引用者注：懶齋）拒まず。乃ち叙を為り、且つ門を分ち、類を別ち、統属する所有らしむ」（原漢文）とある通り、本文の分類整理にも関わったらしい。また西村孫右衛門から刊行されている所を見ると、懶齋が出版の口ききをした事も考えられる。

【居所（三）千本】

『いなご草』に懶齋が寄せた序には「伊嵩埜丈筆をにしの京ちもとの桜が陰にそめ侍る」と、居所に関する言及がある。また【家族（四）次男・象水】の項でも見たが、宮川忍齋『槎行記』元禄十五（一七〇二）年の記事には「ゆきく〜て千本のほとりなる懶齋のぬしをとひ侍りに、…中略…名残ながら西の京を出て」とある。ここでの懶齋の居所は「千本」である。このころの居所が千本周辺にあった事が分かる。

貝原益軒『雑記 陽』（記事年次不明）には長子・敬節の住所が「懶齋子藤井敬節／下長者町千本東入北かは」と記されていて、具体的な番地が明らかになる。

○十月七日、白田畏齋没。懶齋その行状に後序を寄せる。

『京都名家墳墓録』『宝塔寺』の項に墓石に関する記事あり。これによれば、表面に「白田畏齋之墓」、裏面に「新月貞寒信士、元禄三年十月七日没」と刻されているという。『先哲叢談後編』巻二「白田畏齋」の章によれば、名可久、通称五郎左衛門。畏齋は号。本姓は坂口氏。備前の人。享年四十六歳。父の禄を襲って備前に仕えていたが、天和二年（一六八二）に故あって禄を辞し、京都に住む。懶齋や中村惕齋らと交わった。

畏齋の没後、『月下記』巻二「白田畏齋」に、

嗚呼惜いかな天年を仮さずして、知命の年だに致らず終れり。学友葬りを営み、東山霞の谷松の木陰こかげの苔地に埋み、埋れぬ其名ばかりぞ残りし。其行状、藤井懶齋父子書述、伏江惕齋、小原季忠の後語あり。余も物学びに京師に遊び数ヶ月有し時、其親みに惜れて、痛て悲く侍るなり。

とある。畏齋の没後に書かれた行状の執筆に懶齋父子が関わったらしい。白田畏齋の行状は未見だが、その詳細について柴田稿には、「友人たちが藤井懶齋に行状の執筆を依頼したところ、懶齋は畏齋の友人でもあった息子の理定に代わりに書かせ、自らは後序を書き、惕齋にも附語を求めている」（七十八頁）との言及がある。

元禄六年（一六九三）癸酉 七十七歳

△この頃、『竹馬歌』刊行されるか。

【竹馬歌】

該書は教訓的な和歌百三首を集めた和歌集である。たとえば「人は唯いとけなきより誠しくたゞしき道を見聞てぞよき」「武士ぶしの身にはかきらず人として猛きころのなかるべきやは」「山つくり花植小鳥飼ふひとは昼寝の際に碁をやうつらん」など、一般的な生活道徳について詠んだものを集める。

今のところ確認できた諸本で最も早いものは、安永三年（一七七四）刊の『教訓竹馬歌』（大本一巻一冊）である。刊記「安永三年甲午五月吉且／浪華書林 心齋橋筋塩町東側 田原屋平兵衛繡梓」。無署名序

(漢字平仮名交じり文)、漢文跋(末尾に「木由己書」とのみ)あり。挿絵二葉を付す。版面は安永期のものと考えて大過なきさうだ。

にもかかわらず元禄六年(一六九三)という時期にこの項を立てた理由は、井上敏幸氏蔵『竹馬歌』写本の識語(享保十一年三月二十二日、府下黙散人記)に次のような興味深い記事が見えるからである。

竹馬の歌は藤井懶齋先生述る処也。元禄むとせの比、既に梓にえり、師の火災に其板やかれて、今は見る事稀也。華府の井狩翁、年比此歌をたうとべるあまり、其家の童児・つぶねまでに、当にうたはせて相すゝむ(下略)

これによれば『竹馬歌』には元禄六年(一六九三)刊本があったらしいのである。この元禄六年刊『竹馬歌』について、書籍目録では全く確認が取れないが、『蔵笥百首』享保六年求板本に付された広告「藤井懶齋先生目録」(『懶齋の著作目録』の項参照)には確かに「竹馬歌一冊」と載っている。やはり早くから刊行されていたものと見るべきだろう。元禄六年刊本の出現を待ちたい。

元禄八年(一六九五)乙亥 七十九歳

○四月、鳴滝の懶齋宅に大高坂芝山が訪れ、仁齋『語孟字義』についての意見を求める。この頃から鳴滝の妙光寺別墅に隠棲するか。

『適從録』下巻「答高慎夫書」(元禄八年(一六九五)九月十一日付)に、楊齋と懶齋の『語孟字義』に関する反応が載る。四月に、京都に遊んだ芝山はある公家(「槐門」とある)の家で『語孟字義』を目にし

た。その足で鳴滝の懶齋を訪ねて『語孟字義』について話すと、懶齋は「後進の爲に当に正説して邪誕を遏つべし」と、厳しく仁齋説を避難したという(柴田稿二十四頁にも言及有り)。

【居所(四) 鳴滝隠棲】

右に見た大高坂芝山『適從録』下巻「答高慎夫書」によれば、芝山は「遂に鳴滝村へ行き、隠者藤井懶齋を尋ぬ」と、懶齋を鳴滝に訪ねていた。懶齋が鳴滝に隠棲していたことはよく知られているが、所見の言説ではこれが最も早いものである。

鳴滝のどこなのか、という問題に関しては、同じく元禄八年(一六九五)秋に交わされた長岡恭斎、懶齋往復書簡(該当項参照のこと)が参考になる。ここで恭斎は懶齋の居所について、

抑々叟の隠棲、北野を去て已降^{このか}た、何の許を詳にせず。潜に雅丈(引用者注：中邨浄胖)の言に依て、始て識得たり、北山妙光禪刹の別墅に驥伏せることを、

と記している。「北山妙光禪寺」すなわち妙光寺とは、京都市右京区宇多野上ノ谷町にある臨済宗建仁寺派の寺院。江戸初期、檀家の豪商糸屋宗貞の子打它公書が再興し、現在の建物はこの時のものであるという(『角川日本地名大辞典』)。長岡恭斎によれば、懶齋はその別墅^{べつしよ}(別宅)に隠れ住んでいたというのである。

妙光寺の別墅とはどこか。また懶齋はなぜ鳴滝に隠棲したのか。その理由を窺う上で『仲氏語録』の次の記事は参考になる。

○二月十日、和伯立ト共ニ西山懶齋先生ヲ問フ。懶翁曰、「我が此山ニ来ル所以ハ、祖先ノ墓処、此山ノ近辺泉浣(勝又注：泉谷西寿寺)ニアリ。京ニ在時、毎忌日ニ墓参ス。寺僧曾テ云ク、『吾子、老身ニシテ屢墓参ニ勞ス。幸ニ寺内空庵アリ。是ニ寓宿シマジキ



『都名所図会』卷六「鳴滝妙光寺 泉谷西寿寺 法蔵寺」

ヤ』ト。又市朝静処アリト云ヘドモ、山中ノ閑寂、境ト心ト相契テ
 心身養ハル、ニシカズ。故ニ此二ヶ條ノ故ヲ以テ、此ニ來栖メリ。
 これによれば妙光寺の別墅とは、寺内の空庵であつたらしい。また懶斎
 は、忌日ごとに祖先の墓参に來ていて僧から寺内の空庵を勧められたと
 いう。

鳴滝の隠棲は常に一人であつた訳ではなく、息子と同居することもあ
 つたらしい。室鳩巢「答遊佐次郎右衛門第三書」(元禄十年(一六九七)
 二月二月十六日)に「団平、父と仁和寺の傍に同居す」(原文)とあ
 る。「仁和寺の傍」はこの妙光寺別墅と考えてよいが、次男の象水(団
 平)との同居が明記されている。また注意しておきたいのは、それまで
 の千本の住宅を引き払ってはいないらしい事である。【居所(三)千本】
 にも元禄十五年(一七〇二)に宮川忍齋が千本に懶斎を訪ねた記事を掲
 載した。二人の子と共用していたものだろうか。

やや後の資料になるが、上に掲載した『都名所図会』(安永九年(一
 七八〇)刊)卷六所載「鳴滝妙光寺 泉谷西寿寺 法蔵寺」(掲載図は
 『新修京都叢書』より)の図は、懶斎隠棲のさまを想像するのに大変有
 用である。右面のほとんどを占めるのが妙光寺。懶斎はこの寺内の一庵
 に隠棲した。そして左面の左上にあるのが懶斎一族の菩提寺である西寿
 寺。懶斎は忌日ごとにこの山道を登って祖先の墓所に参っていたのであ
 る。

【西寿寺の再興】

現在西寿寺の懶斎墓周辺は整理されており、懶斎の墓の左側に五つの
 墓石が並ぶ。『京都名家墳墓録』を参考にしながら見ると、このうち最
 も右側にあるのが次男・象水の墓であり、その左隣にあるのが長男・革
 軒の墓であることが分かる。これに加えて、閑唱寺蔵「当寺略系譜」

(前出)を参考にすると、さらに二つの墓の主を明らかにできる。革軒の左にある「了学律師之墓」とある墓石は、懶齋の妹嫁である京都閑唱寺の第十二世住職のもの。さらにその左にある「了妙禅尼」とある墓石は、早世した了学の娘のものである。

ではなぜ懶齋ゆかりの墓石が、こうも数多く西寿寺に安置されているのであろうか。その理由は、懶齋の家系に求める事ができるようだ。西寿寺蔵の由緒書(寛延元(一七四八)年閏十月成。八文字屋八右衛門作)には次のように記されている。改行は私に施した。

乍恐奉申上候

一、元和年中ニ、俗名北出嘉兵衛、法号三観入心と申仁、和泉谷ヲ少々買得致、西寿院と申、隠遁致居被申候。寛永四年、曾祖父も人数内ニ而、山ヲ求添被申候。則沽券状奉入上覽ニ候。

其後寛永八年に、右入心往生被致、甥ニ俗名北出太郎右衛門、法号為三と申仁、被讓候。

此為三、身持不宜。仏地ヲ遊樂之地ニ被致候故、近郷惡ミ候而、為三江之往来之人ニは狼藉等致候ニ付、住家ニ不成申、荒宅と成有之候処、私曾祖父浄観、三条法林寺袋中和尚ヲ帰依仕罷在候。右入心も袋中和尚帰依被致、後生友と申ニ而、俗人ニ而有之候節より、親ク罷在候ニ付、和泉谷江も募参候而、念比ニ有之候故、右荒宅之儀、為三と相談之上ニ而、浄観少々ニ而為三より買得仕、三条法林寺袋中和尚ヲ招請仕、念仏之地ニ弘シテ、泉谷山西寿寺と被改候。

但シ寛永十四年ニ而候。此年数書有之候。過去帳御座候。此由緒を以、私方は法林寺ヲ表寺と仕、曾祖考共ニ西寿寺江葬申候。

其上祠堂銀勘定之儀は袋中和尚より代々吟味役ヲ仕、古帳ニも勘定ニ連判仕罷在候。以上。

寛延元年辰

八文字屋

閏十月

八右衛門(印)

御奉行様

右之通御尋ニ付 御公儀様江奉差上置候也

これによれば、西寿寺は一時廃れていた。しかし寛永十四(一六三七)年、八右衛門の曾祖父である浄観なる人物と三観入心(北出嘉兵衛)なる人物とが買い取り、帰依する三条法林寺の袋中和尚を招請して泉谷山西寿寺と改称し、再興したというのである。

西寿寺を買い取った二人のうち、浄観という人物は先に見た「閑唱寺蔵『当時略系譜』による懶齋の兄弟関係」に見える名前である。浄観は、藤井懶齋の弟(一説に兄)である八文字屋八右衛門の法号であった。つまりこの西寿寺は、藤井懶齋の兄弟である八文字屋八右衛門が再興に深くかかわった寺だったのである。藤井懶齋の一族がこの地に葬られているというのは、そうした縁によるものだった訳である。

○秋、京都の儒者長岡恭斎から書簡来る。懶齋返書する。

すでに何度か言及している資料であるが、『扶桑名賢文集』(元禄十一(一六九八)年)巻五に長岡恭斎と懶齋との往復書簡が収められている。藤井懶齋が中邨浄胖なる人物を遣わして長岡恭斎の父へ見舞いを述べた。これに対する長岡恭斎からの礼状と、それに対する返事との二通が掲載されているのである。文中に年月日は記されていないが、懶齋からの書簡中に「嗚呼行年七十有九」とあり、この年だと判る。季節を秋としたのは恭斎からの書簡中に「涼氣時に若て頃涼爽を覚ふ」とあるのによる。

元禄九年（一六九六）丙子 八十歳

△正月、中村惕斎、懶斎八十歳を賀して詩を作る。

『惕斎先生文集』巻二に、「丙子正月寿懶斎先生八十歳」として「高臥幽窓謝世塵／喬松凌雪幾回春／何須御宴受鳩杖／山水相宜寿樂人」とある。

□十月十五日、遊佐木斎、室鳩巢宛書簡で懶斎を「篤行の君子」と評する。

木斎・鳩巢による懶斎評のはじまり。元禄十年、【鳩巢・木斎往復書簡】の項参照。

元禄十年（一六九七）丁丑 八十一歳

□正月、『本朝廿四孝』刊。『仮名本朝孝子伝』の海賊版。

半紙本三巻三冊。漢字平仮名交じり文。刊記「元禄十丁丑年正月吉旦／平野屋／松倉宇兵衛開板」。序跋、著者名等ないが、刊記脇に「絵師鳥井庄兵衛」とある。

該書は懶斎『仮名本朝孝子伝』から二十四話を選び、各章に独自の挿絵を付して一部の書とした、いわば海賊版である。拙著『本朝孝子伝本文集成』（平成二十二年三月 明星大学）に翻刻し、解題を付したので、詳細はそちらに譲る。

□二月十六日、室鳩巢、遊佐木斎宛書簡にて懶斎を評す。

元禄十年、【鳩巢・木斎往復書簡】の項参照。

□六月十八日、遊佐木斎、室鳩巢宛書簡で再び懶斎を評す。

【鳩巢・木斎往復書簡】

この時期、室鳩巢と遊佐木斎という二人の儒者が、書翰で懶斎の人物を論じ合っている。室鳩巢は『駿台雑話』『鳩巢小説』などで知られる朱子学者。のちに幕府の儒官となるが、この当時は加賀藩儒だった。いっぽう遊佐木斎は闇斎学者で、当時は仙台藩儒であった。共に当時三十八歳であり、藤井懶斎とは四十年以上あとの世代である。

この往復書簡は『前編鳩巢文集』『日本道学淵源統録』などですでに紹介されているが、『日本思想大系』十四「貝原益軒・室鳩巢」で本文が整理されているので、それに依ってまとめ直しておく。両者の間で懶斎についてまとまった言及があるのは、

①元禄九年（一六九六）十月十五日、遊佐木斎「室直清に答ふる第二書」

②元禄十年（一六八七）二月十六日、室鳩巢「遊佐次郎左衛門に答ふる第三書」

③同年六月十八日、遊佐木斎「室直清に答ふる第三書」

①で木斎は、鳩巢に対し、次のように記している（原漢文、以下同じ）。

又聞く、京師に藤井懶齋なるものありと。年七十有余。初名は真辺仲庵。操軒・楊齋の友とする所なり。嘗て『本朝孝子伝』、『諫諍録』を著す。その志趣の善、文藻の美、また多く見えたり。頃ろ我が友上山泰清、盛んにその人と為りを称す。その二書の如き、愚を以て見れば、則ちまま議すべきものありといへども、蓋しまた篤行の君子なり。前書にこれを遺る。故に今これに及ぶ。足下また聞くことあらば、異日示し及ぼされよ。

木齋は、上山泰清なる人物が懶齋をさかんに誉めている事を記し、自らも懶齋の著書に若干の異論を感じながらも「篤行の君子」だとしている。京都で米川操軒や中村楊齋らに学んだことのある木齋が藤井懶齋をよく知らなかったとは意外だが、ここでの書き方は明らかに面識の無い人に対するものである。そしてその上で鳩巢に、懶齋に関する情報を求めている。

これに対し、②で鳩巢は次のように答えている。
藤井懶齋、直清もまたその人を聞く。この地に、京師より仕ふるものあり。素より懶齋を識り、直清の為にその人と為りを語る。言あり徳あるの一隠君子なり。孟子、王を以て斉・梁の君に説く。而して懶齋は心にこれを慕ふ。その言、条理あり。今具に録する克はず。常に居家し、慨然として曰く、「江都もし命ありて隠士を召さば、行に老死すといへども必ず往き、江都に至り、一たびこの義を以て陳ぶれば、また足れり。一言の後、もし在京の縉紳これを聞かば、舌を断たるといへども、また悔ゆることなし」と。これ足下の言議を断つ所にして、而も彼は乃ち平生の志、ここにあり。思ふに足下これを聞かば、必ず大いにこれを悪まん。

鳩巢が提供した懶齋のエピソードは、京都から来た人物が語ったもので

あった。懶齋は孟子が宣王・恵王に王道を説いた事を慕っていた。そして江戸幕府から招かれ、幕府に一言申し述べたことを強く望んでいた。そのためなら、死んでも、京都の公卿から舌を断たれても悔いが無い、と考えていたというのである。このエピソードを述べた鳩巢は、木齋がこれを知ればかならず憎むにちがいない、と述べている。懶齋の江戸幕府への志向を指摘して興味深い。

『前編鳩巢先生文集』に載る②の書翰はこれで終わっているものの、別本では次のような文が続く。

懶齋、年八十余。子あり、団平と曰ふ。卓犖にして兵を喜び、好んで天下の形勢を説く。その父は、操軒・楊齋と理学の友たるが、而も団平は深く父執の悪む所となる。然るに団平は以て意となさず。懶齋もまた禁ぜず。……中略……団平は父と同じく仁和寺の傍に居す。

木齋が誤解していた懶齋の年齢を訂正したあと、次男・象水（団平）の人となりについて記している。それによれば象水は兵学や天下国家を論じる事が好きであつたらしい。それが父執（父の友人）に嫌われていたものの、象水は気に掛けず、懶齋もとくに禁じなかつたというのである。

③の木齋書翰は、鳩巢から提供された懶齋父子のエピソードを聞いての返事である。懶齋に幻滅した様子が明らかである。

かの懶齋、老いて死せず。これもまた一賊のみ。然るに平日、その人となりを聞き、又孝子伝、諫諍録を觀るに、甚だ美とすべし。惜しいかな。知見一たび差がひて、終にかくのごときの乱賊に至る。この老漢、これを聞くも、堅く執りて変ぜじ。然れども万一これを聞き、その志を易へ、その説を改むれば、則ちこれまた本邦神化の一

なり。縁あらば、則ち高明それ忠告せよ。そもそもかの懶齋、孔朱の道を学べるに、而もこの言あるは、則ち何ぞや。窃かに謂ふに、いはゆる新民経済なるものを学び、覚え、功利の説に陥れるなり。鳩巢と木齋とのやりとりの中で懶齋が批判の的となっているのは、懶齋の幕府にすり寄ろうとする姿勢である。幕府に一言申し述べたいという懶齋は「功利の説に陥」っており、万が一彼が心を改めれば、それが「本邦神化の一」だといっているのである。

このように、懶齋の預かり知らぬ所で、後の世代の儒者たちによって懶齋評判がなされていた。懶齋は山崎闇齋に学んでいたこともあり、闇齋派の一人として位置づけられる事も多い。しかし彼に公卿より幕府というような江戸よりの一面があったと指摘されているのは、従来の懶齋観とは異なるものであり興味深い。そしてその事が後代の儒者たちに批判されていることも、江戸時代の幕府と天皇との関係を考える上で見逃せないものがある。

《前号までの追補》

※明暦二年（一六五六）【満田懶齋との混同】の項末尾に、つぎの文章を加える。

なお、『揖保郡地誌』八四七頁に次のような記事を見出した。

○満田古文

満田古人は揖保郡正条村浄栄寺の子なり。幼にして常ならず。経書

一たび教授せば、誦せずと云ふことなし。本多甲斐守政朝、龍野城主の時（自元和三年至寛永四年）伊保川に漁獵して正条に至る時に、古文、書を懐にして水辺に遊ぶ。政朝之を奇なりとして、船中に呼びて之に問ふに、能く古文真宝を暗誦す。政朝感称して措かず。因りて命じて古文と名く。時に年八歳なり。後年林学士道春の門人となり、学業大に進み、名遠近に聞ゆ。祿三百石を得て本多侯に歴任す（龍野誌）。文集等あり。元祿四年辛未八十一歳にて姫路に卒す。其子意春、家業父に勝る。子孫今に本多家に仕へて下総古河に住す。今正条の西山に浄栄寺の塋域あり。其傍に古文の墓石あり。満田懶齋の生まれが揖保郡（龍野藩）であったことをはじめ、家系、幼年時の逸話、号「古文」の由来、没年、墓所など、さまざまことが明らかになる。

（未完）

*この論文は、科学研究費補助金（若手研究（B））『本朝孝子伝』研究——「孝」から見た近世前期文学の再検討」課題番号二〇七二〇〇〇六三 研究代表者・勝又基の助成を受けたものである。

